

## クリスマスの思い出

米田 輝臣



サンタ・ファミリア(聖フランシスコ病院内) 撮影:片岡勝義

カトリック教会は「クリスマス」を公式には「主の降誕」と称します。教会には特有の「暦」があり、これを「教会暦」又は「典礼暦」と称し、教会に於ける日常または年間諸々の(典礼祭儀)は、これによって執り行われます。教会は12月25日のクリスマスを迎えるにあたり、約4週間前からその準備をします。その準備とは、クリスマスの意義を思い巡らすための期間であり、この期間を「待降節= Advent」と称します。待降節の期間は4回の日曜日(主日)を含みその最初の日曜日を「待降節第1の主日」と称し、これが年間最初的主日(日曜日)となります。この待降節第1主日の1週間前の日曜日(何日かは未定ですが11月下旬になります)を「キリストの主日」として讃えます。即ち、この日が教会暦では年間最後の主日(日曜日)で、カトリック教会の1年は「待降節第1の主日」に始まり、「キリストの主日」で終わるのです。またカトリック教会は、年間最後の月である11月を「死者の月」と定め、この世を去った全ての人々の「ご

冥福をお祈り」するよう勧められています。「死者の月」は、日本社会で一般に行われる(お彼岸)または(お盆)の行事に似ています。カトリック教会では、クリスマスのお祝いを12月25日から約3週間行います。(25日が何曜日であるかでお祝いの期間は変わる)クリスマスが近づくと11月半ばぐらいから街中クリスマスソングが鳴り始めますが、待降節の期間は文字通りイエス・キリストの降誕を待つ時節でありますから、クリスマスソングなど決して歌いませぬ。また11月は「死者の月」でもありますから、なおのことです。教会の信徒の多くはこの時期、身内は勿論ですが知人・友人の死者のために祈り、教会に「ミサ祭儀」をお願いする慣習があります。さて今回私に与えられたテーマは「クリスマスの思い出」であります。待降節は「主の降誕」の祝日をお迎える準備の期間であると申しましたが、その準備の第一に聖堂内の装飾および「馬小屋」造りがあります。クリスマスに「馬小屋」とは？

「ガリラヤの町ナザレからユダヤのベツレヘムへ、ヨゼフはいいなずけのマリアを伴って旅をした」とあります。新約時代の中東パレスチナの地図でその旅の距離を推し量ってみれば、100キロ以上あるように思います。この文書の最後の部分に「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」とありますが、臨月のマリアの姿を見た宿屋の人達が見るに見かねて家畜小屋に案内したのでしょう。

イエス・キリストは「馬小屋」=「家畜小屋」で産まれたことになっています。ですから、クリスマスには各教会で「馬小屋」を造るのです。そして「幼子イエス」を「飼い葉桶」に寝かせるのです。クリスマスは馬小屋造りは楽しいものです。私も高校3年生の時、仲間と一緒に楽しみながら造りました。いろいろと話し合っているうちに、仲間のH君が妙なことを言い出しました。「イエス・キリストは王様だから家畜小屋じゃなくて「金閣寺」にしよう!」と。まさに驚きの発想です。結局「金閣寺」に決まりました。こんなこと今まで見たことも聴いたことありません。校長の神父様が何と言われるか?とても心配でしたが、モンダイなかつたようです。

不肖 私はこの時、金閣寺に変わった「馬小屋」をバックに「イエスの誕生地ベツレヘムの創造図」を描きました。

(長崎歴史文化協会 会員)



### 風信

- 十二月と言えば二十四日夜のクリスマス、三十一日の除夜の鐘。そして年末年始の片づけ物。
- 今年も皆様には大変お世話になりました。本当に有難う御座いました。
- さて、私は恒例により野口文竜の「長崎歳時記」(寛政丁巳著)を読みますと十二月の項には、現在では其のほとんどが失われている行事が数多く書かれています。
- 然し私達の子供の頃までは、年末の二十日前後になりますと各家庭を「餅つき屋さん」達が大きな竈や杵・臼等を担いで回って来られ、各家の餅をついておられました。
- 現在、各家の戸口にあつた「門松」もあまり見かけなくなりましたし、羽子板や子供達の「コマ回し」もなくなつたようです。
- 新年を迎える御雑煮の用意はできましたでしょうか。「歳時記」を読むと次のように記してありました。
- 十二月暮ころより神佛壇・家財・浴室・雪隠に至るまで燈火をかかげ昼のごとくにし：翌朝の雑煮の具をこしらえ屠蘇を用意す：雑煮は次の六品を見合せ串にぬき置く。「水菜・するめ・大根・こんぶ・牛房・南京里芋」だしを煮て餅を入れ雑煮椀に串よりぬき出して出す。但し古式には干あわび・煎海鼠を添うも、事情ありて近年は之の二種を省く：
- 本年度の最終講座は十二月十八日(月)午前十時半より長崎学講座。翌十九日(火)午前十時半より古文書研究会、二十二日(金)午後二時より食文化研究茶話会となります。
- 本会の事務局の終了日 二十五日(月)午後三時。新年は一月五日(金)午前十時より開所いたします。

一、十二月に御寄贈いただいた書籍

○織田毅氏より「長崎歳時記(一)」本書は長崎学研究所紀要「長崎学 創刊号」として織田氏が編纂されたもので、長崎の年中行事を知る上に必読の書である。今回は「天巻」のみの発刊であり「地巻」の発刊が待たれる。

○長崎歴史文化博物館より「研究紀要2016」。各種の研究論文あり、大いに参考になりました。

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所2F

